幼児の自己主張と対人関係¹

——対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性——

広島大学 山本愛子²

Effects of intimacy and familiarity on self-assertive strategy in interpersonal conflicts among preschool children

Aiko Yamamoto (Department of Child Psychology, Faculty of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashihiroshima 739)

The purpose of this study was to investigate the effects of interpersonal relations on self-assertive strategy. One hundred and thirty-four preschool children, 70 boys and 64 girls between five and six years old, were asked a set of questions concerning how they would feel and behave when a peer provoked them. The peer intimacy and familiarity were systematically varied, and the main results were as follows: High-intimacy/high-familiarity group chose self-assertive strategies more frequently than High-intimacy/low-familiarity group, and Low-intimacy/low-familiarity group chose self-assertive strategies more often than Low-intimacy/high-familiarity group. It was also found that the self-assertive strategy they would choose depend on the intimacy and familiarity of the peer. Implications of the findings for social cognitive ability and self-regulation of preschool children were discussed.

Key words: self-assertive strategy, preschool children, intimacy, familiarity, interpersonal conflicts.

保育所や幼稚園に入園した子どもは、新しい環境への適応が求められ、さまざまな経験を通して自己調整能力を獲得し、主体的で自律的に行動できるようになっていく。しかし、はじめは新しい環境にうまく適応できず、自己の欲求が社会的な圧力によって規制されるような問題場面に出会い、対人葛藤を経験することも多い。

子ども間で生じる対人葛藤は、社会的・認知的発達、社会言語習得を促す場である (Shantz & Hobart, 1988) と同時に、他者の意図を推理する能力をさまざまな社会的関係の中で学び、自分の主張を表現するための方略を学習する貴重な契機でもある。つまり、幼児は仲間との対人葛藤を通して社会性を学習していくといっていよい。子どもの対人葛藤は、自分と他者との要求のくい違いから生じるため、その解決には相互の

要求を調整することが必要である。従って、自己の要求を明確にし、それを主張するための方略をとり、他者の要求や立場を理解し、解決方法を発見するといった過程は、自己主張、自己統制、他者理解、感情の共感、規則の理解など自己意識と社会的コンピテンスの発達を基礎にして成立している (藤崎, 1992) と考えられ、多くの研究が行われている (東・野辺地, 1992; Hay & Ross, 1982; 本郷・杉山・玉井, 1991; 倉持, 1992; 無藤, 1992)。自己認識は自生的なものではなく、他者との相互交渉を通してつくられる (内田, 1993) ため、子どもは他者に対して自己主張を行う中で次第に自己意識や自我を確立させ、更に、自己および他者に対しての認識を深めていくのである。従って、他者との意見の対立が最も明確になる対人葛藤場面は、とりわけ子どもの自己主張や社会的コンピテン스가発揮されやすい (小林, 1993) 場面であることを考慮し、特に幼児の対人葛藤場面に注目して、幼児の自己調整能力を検討した。

近年、自己調整能力は自己主張・実現面と自己抑制面との2側面からとらえられ (柏木, 1988)、幼児期におけるそれら2側面の発達の検討が行われているが、そのうちの幼児の自己抑制面に焦点を当てた研究を紹介する。Doyle, Connolly, & Rivest (1980) は、子どもは新しい環境や新奇なもの、見知らぬ人に出会うとしばしば抑制的になるということを明らかにして

¹ 本研究は、広島大学祐宗省三教授 (現武庫川女子大学教授)、山崎晃助教授 (現広島大学教授) の指導により 1993 年度に広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。なお、本研究の一部は、1993 年中国四国心理学会第 49 回において発表された。

² 本研究をまとめるにあたり、御指導、御助言頂きました祐宗省三先生 (現武庫川女子大学教授)、山崎晃先生に深く感謝致します。また、実験および調査に御協力頂きました東広島市立吉土実保育所、東広島市立高屋東保育所の諸先生方ならびに園児の皆さんに心より御礼申し上げます。

いる。また、子どもの抑制傾向と相手との既知性要因との関係を検討した Asendorpf (1990) は、自己抑制と相手をよく知っているか否かという既知性との高い関連性を報告している。しかし、一方の幼児の自己主張面と仲間との既知性（被験児が未知の者同士か友だち同士か）との関係については未だ十分に研究が進んでおらず検討の余地を残している。山崎・白石 (1993) は、自己実現できる子どもは自己主張と自己抑制の両方ができる子どもであることを報告しているが、新環境へ移行したばかりの幼児は、自己実現へと向かうために適切な解決方略（自己主張、自己抑制を含む）を試行錯誤しながら探索する時期にあることを考慮すると、相手の不当な行為に対しては明確に自分の欲求・意志を伝達し、そのことを通して問題解決を図ろうとする自己主張行動は、後の自己実現に到達する必要不可欠な段階であると言えよう。

また、問題解決方略と仲間関係における相手の社会的地位（仲間集団からの好意や受容度など）の関係を検討した Dodge, Murphy, & Buchsbaum (1984) は、同じ対人葛藤場面であっても、仲間関係における相手の社会的地位の高さによって子どもの自己主張行動の出現が異なることを示している (Dodge et al., 1984; Price & Dodge, 1989)。しかし、幼児でも特定の友情関係をもつ子どもは、たとえ社会的地位が低くとも、コンピテントな行動をとることが多い (Howes, 1987) との報告がなされており、更に、子どもの抑制傾向と仲間との既知性要因との関係を検討した Asendorpf (1990) の研究の中で、見知らぬ人に対して抑制的になるのは、幼児にはコンピテンスがないというよりも見知らぬ人がいるときに特定の社会的遂行能力がなくなるからだということが示唆された。従来の研究において、幼児の物をめぐる対人葛藤場面においては、物を先に所有していた者が勝つこと、更に、勝敗には相手との力関係 (dominance) が影響を及ぼしていること (Bakeman & Brownlee, 1982) が明らかである。この能力はいわゆる社会的コンピテンスと言われる社会的行動の有能さの問題と関係している。社会的コンピテンスは双方の力関係を認知し分ける能力、つまり、対人関係を認知する能力を備えている場合により有効に作用するものと思われることから、幼児の対人葛藤場面での問題解決方略の選択は、相手の特性をよく知っているか否かという既知性の程度の影響を受けていると予測され、従って、相手の既知性 (familiarity with peers) の変数を統制した。

また、仲間との既知性要因と同様に、対人葛藤場面における当事者間の親しさの度合（親密性）は、問題解決方略に多大な影響を及ぼす重要な要因である。親密性 (intimacy with peers) という変数は、仲間関係や問題解決方略に関する研究においてだけでなく子どもの遊びに関する研究においても重要であることが

Doyle et al. (1980) によって主張されている。Doyle et al. (1980) は、子どもの遊び場面での相互作用と親密性の関係を検討し、その結果、低親密児と比べて高親密児に対しては相互作用が多く、それを維持しようとする行動が増加し、相互作用中の遊びもより複雑化することを明らかにしている。その他 Hartup, Laursen, Stewart, & Eastenson (1988) は、葛藤場面における子どもの相互のやり取りと親密性を観察し、親しい友人同士の場合では、葛藤が短いやり取りで終結したり妥協が生じるが、相手が親しい友人でない場合には葛藤が長く続き、勝者と敗者が明確になる傾向があることを示唆している。これらは、仲間との親密性が子どもの社会的行動に多大な影響を及ぼしていることを示している。

Mize & Ladd (1988) は、対人葛藤場面を用いて幼児に対して面接を行い、言語報告と人形を用いた実演反応を測定し、教師評定、実際の行動観察データとの関連を検討している。その結果、いずれの反応もほぼ教師評定や行動観察を予測しており、幼児においても面接によって行動観察とほぼ同等の測定が可能であることを報告した。従って、本研究においては、幼児の認知面（場面への不快感、自己主張の意識化、問題解決方略の選択、選択理由、方略の有効性等）をより明確にするために直接面接を行い、認知過程を明らかにする質問方法をとった。

上述の諸々の点を考慮した上で、本研究では仮設の対人葛藤場面を用い、仲間との親密性および既知性要因が、特に幼児の自己調整能力の中の自己主張能力にどのように影響を及ぼすのかに注目した。友人という安定した関係が互いの行動をより自由にさせ自己主張を促す場合と逆の場合とが考えられるが、いずれとなるかは被験児が対人関係をどのようにとらえているかに依存していると思われる。従って、仲間との既知性と親密性を明確に区別し、変数を統制した。なお、幼児間においては物の所有を巡る争いが高い頻度で確認されている (Genishi & Dipaolo, 1982; 山本, 1991) ことから、本研究においては、同年齢の友達との玩具を用いた遊びの中で物を巡る対人葛藤が生じた場合に注目し、幼児の自己主張は、当事者間の親密性および既知性の程度といった要因とどのように関連しているのかを検討することを目的とした。更に、自己主張といってもその内容は多様であり、質的な相違が考えられる。そこで、幼児が自分の意志を他者に主張する具体的方略も併せて分析した。本研究で検討した仮説は、高親密でかつ高既知児に対しては、既に仲間関係の成立と安定が考えられるため、他の条件群よりも自己主張解決方略が多く用いられるであろう、という点であった。

Table 1
幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略の分類

自己主張解決方略	内 容
解決方略 1(以下 S1 とする)…身体的攻撃による自己主張対応	: 叩く, 押す
解決方略 2(以下 S2 とする)…非言語的な獲得による自己主張対応	: 玩具を奪われることへの拒絶・抵抗, 取り返し
解決方略 3(以下 S3 とする)…他者依存的な自己主張対応	: 先生・友達に言う, 助けを求める
解決方略 4(以下 S4 とする)…説得・抗議による自己主張対応	: 言語的拒絶, 返却の要求・説得, 権利の主張
解決方略 5(以下 S5 とする)…協調的な自己主張対応	: 一緒に遊ぶ, 相手の意見の考慮, 交互に使用
解決方略 6(以下 S6 とする)…向社会的な自己主張対応	: 玩具の授与を願望する, あげたい

注) なお, 非自己主張的解決方略には, 泣く対応, 無対応, 諦め対応, 回避対応, 同調対応, 我慢対応が含まれている。

方 法

被験児 H 市の 2 箇所の公立保育所の園児 143 名。なお, 実験手続きの際に不備があった場合やデータが不十分であった被験児は分析から除外した。従って, 最終的には, 年中児 66 名 (男児 34 名, 女児 32 名; 平均年齢 5 歳 3 か月), 年長児 68 名 (男児 36 名, 女児 32 名; 平均年齢 6 歳 4 か月), 計 134 名 (男児 70 名, 女児 64 名) であった。

実施時期 1992 年 11 月下旬から 12 月上旬の自由保育時間。

要因計画 2(親密性: 高い, 低い) × 2(既知性: 高い, 低い) の 2 要因計画であった。なお, 親密性および既知性はいずれも被験者間要因であった。

材料 呈示刺激は, 対人葛藤が生じる砂場場面である。内容は, 主人公がスコップを用いて砂山にトンネルを掘って楽しく遊んでいるとき (シーン 1), そこへ同年齢でかつ同性の友人がやってきて, 何も言わずに使用中の玩具 (スコップ) を横取りした (シーン 2) という紙芝居であった。

対人葛藤場面における問題解決方略の測定

遊びの中で対人葛藤が生じつつある場面を描いた紙芝居を男児用と女児用の 2 組用意し, その際に用いる問題解決方略を測定した。なお, 被験児が主人公の立場や話の内容を理解しやすいように確認しながら説明した。

手続き

事前の手続き 予備調査: 園生活の遊びの中で子どもたちの間で多く見受けられる対人葛藤場面は, 保育者と協議した上で砂場場面を設定した。なお, 本実験の開始以前に, H 市の F 幼稚園の年中児 (男児 9 名, 女児 9 名) 18 名に紙芝居を実施したところ, 全員が内容を十分に理解していた。従って, 本実験で使用了材料は幼児にとって理解可能なものであったと言える。但し, 親密性と既知性は紙芝居の登場人物の特性により操作した。

親密性の操作: 主人公との親密性の程度を“高い”“低い”の 2 段階で査定した。同じ組の同性で“好きだと思っていて仲良くしている子”を高親密条件, “嫌な子だと思っていて仲良くではない子”を低親密条件とした。

既知性の操作: 主人公に対する既知性を, “高い”“低い”の 2 段階で査定した。同じ組の同性で“前から同じ組の友だちで, その子がどんな子かをよく知っている子”を高既知条件, “昨日初めて保育所に入ってきたばかりの友だちで, 昨日と今日しか遊んでいないからあまりどんな子かよく知らない子”を低既知条件とした。4 群は高親密・高既知条件 (以下 HH 群とする), 高親密・低既知条件 (以下 HL 群), 低親密・高既知条件 (以下 LH 群), 低親密・低既知条件 (以下 LL 群) とし, 被験児の年齢や性別がほぼ均等になるように調整して各群にランダムに振り分けた。

本実験 実験は, 保育所内の一室に被験児を誘導し, 実験者 1 名と被験児 1 名が向き合う状態で行われた。まず, 紙芝居 (A4 の大きさの画用紙 2 枚) を読み聞かせ, 登場人物の特性を説明し, 話の内容を確認した上で以下の質問を行った。はじめに, 幼児の対人葛藤場面における問題解決方略を査定するために“〇〇ちゃんだったらこの後どうしますか?”と行動を予測させ, あらかじめ予備調査によって抽出しておいた 12 の方略を描いた絵カードを用いて, 絵カードに描かれている行動 (問題解決方略) を 1 枚ずつ説明しながらランダムな順序で被験児の前に提示し, “〇〇ちゃんがこんなときはこうする, と思ったのはどれなのかな? そのカードを指でさしてね”と尋ね, その後“本当にこれでいいですか?”と確認する。それから, “どうしてそうするのかな?”とその理由を質問した。次に, 被験児の場面認知を査定するために, 対人葛藤が生じようとしている場面を描いた紙芝居を指さしながら, “〇〇ちゃんはこのときどんな気持ちかな?”と 3 種類の表情カード (ニコニコ顔, シクシク顔, プンブン顔) より一つを選択させた。その後, 自己主張する (自分の気持ちを相手に言ったり伝えたりする) のか, そうではない (非自己主張解決方略) のかを明

確に区別するために“それでは、〇〇ちゃんは自分の気持ちを相手にはっきりと言ったり伝えたりするのですか？ それとも相手に自分の気持ちを言わないで知らせないのかな？”を尋ね、“自分がどう思っているか、どうしてほしいのかをはっきりと相手に言って伝える”もしくは“自分の気持ちを相手に言わないで知らせない”の2件法で回答させた。最後に、解決方略の有効性をどのように判断しているかを査定するために“〇〇ちゃんがそうしたら、相手はスコップを返してくれるかな？”を、“返してくれる”と“返してくれない”の2件法で回答させた。すべての質問が終了した後、紙芝居の内容を正確に理解していたかを再度確認した。なお、分析は適切であった被験児134名を対象に行った。

問題解決方略の分類 問題解決方略の分類は、本研究と同様な方法によりあらかじめ予備的に実施した調査に基づいて作成した絵カードの選択によって行った。予備調査より抽出された解決方略は、身体的攻撃による対応、非言語的な獲得による対応、他者依存的な対応、説得・抗議による対応、協調的な対応、向社会的な対応、泣く対応、無対応、諦め対応、回避対応、同調対応、我慢対応、以上の12種類であった。このうち、泣く対応、無対応、諦め対応、回避対応、同調対応、我慢対応と回答した子どもの中には、自分の意志や欲求を伝達するため（自己主張するため）にその問題解決方略を用いるという子どもがほとんど見られなかった。それ故、本研究においては、これら六つの行動を選択した幼児の方略は自己主張ではないと分類する（Table 1 参照）。

結 果

各条件群の子どもの場面に対する感情認知

群ごとに、被験児の各条件群の子どもの場面に対する感情認知の頻度を査定するために、3条件（ニコニコ顔、シクシク顔、プンプン顔）間の χ^2 検定を行った。各条件群の子どもの場面に対する感情認知の頻度を、Table 2に示す。その結果、すべての群間で有意差が見られた（ $p < .05$ ）。HH群においては、ニコニコ顔がシクシク顔およびプンプン顔よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1) = 18.615, p < .01$ ； $\chi^2(1) = 9.323, p < .01$ ）。HL群においては、ニコニコ顔がシクシク顔およびプンプン顔よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1) = 21.16, p < .01$ ； $\chi^2(1) = 6.4, p < .05$ ）。また、プンプン顔がシクシク顔よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1) = 6.125, p < .05$ ）。LH群においては、ニコニコ顔がシクシク顔およびプンプン顔よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1) = 18.182, p < .01$ ； $\chi^2(1) = 8.333, p < .01$ ）。LL群においては、ニコニコ顔がシクシク顔およびプンプン顔よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1) = 18.182, p < .01$ ； χ^2

Table 2
各条件群の子どもの場面に対する感情認知の頻度

親密性 既知性	高 群		低 群	
	高 群	低 群	高 群	低 群
ニコニコ顔	2	1	1	1
シクシク顔	24	24	21	21
プンプン顔	7	9	11	12

Table 3
対人葛藤場面における各条件群の自己主張
解決方略の選択率

親密性 既知性	高 群		低 群	
	高 群	低 群	高 群	低 群
自己主張問題解決 方略の選択率	.848 (28/33)	.735 (25/34)	.394 (13/33)	.618 (21/34)

注) ()内は、(自己主張問題解決方略を選択した人数/群内の全人数)である。

(1)=9.308, $p < .01$)。つまり、4群ともにニコニコ顔よりプンプン顔、あるいはシクシク顔の方が多く選択されており、場面をネガティブな場面ととらえていると言える。

対人葛藤場面における自己主張解決方略の選択

対人葛藤場面における各条件群の自己主張問題解決方略の選択率を Table 3 に示し、各群の自己主張・非自己主張方略それぞれの選択頻度を Figure 1 に示し

Figure 1. Frequencies of selection in each group of self-assertive vs. non-assertive strategies.

HH: High-intimacy/high-familiarity
HL: High-intimacy/low-familiarity
LH: Low-intimacy/high-familiarity
LL: Low-intimacy/low-familiarity

Table 4
各条件群の自己主張・非自己主張行動選択の理由の割合

行動選択の理由	親密性	高 群		低 群	
	既知性	高 群	低 群	高 群	低 群
〈自己主張する理由〉					
・自己の主張を理解(返却)してくれる		.250	.346	.154	.143
・自己主張後も仲良くできる(遊べる)		.214	.115	.077	.143
・(いつも)自分に玩具を貸してくれる		.179	.077	.230	.238
・(いつも)自分と一緒に遊んでくれる		.143	.154	.154	.190
・相手は自分に従う(勝敗に関すること)		.071	.077	.077	.095
・相手の性格(優しい等)に関する言及		.107	.115	.077	.095
・その他		.036	.115	.231	.095
〈自己主張しない理由〉					
・自己の主張を理解(返却)してくれない		.000	.222	.250	.308
・相手は自分よりも強い(自分は負ける)		.000	.111	.200	.231
・後から仕返し(報復)される		.200	.000	.350	.231
・仲直りできない(仲間関係の断絶)		.200	.222	.050	.000
・遊べなくなる(遊びが維持できない)		.600	.333	.000	.154
・相手の性格(恐い等)に関する言及		.000	.000	.150	.077
・その他		.000	.111	.000	.000

Table 5
各条件群の自己主張行動予測(玩具返却)の有効性の割合

	親密性		高 群		低 群	
	既知性	高 群	低 群	高 群	低 群	
返却の可能性あり	1.00	.960	.615	.905		
		(28/28)	(24/25)	(7/13)	(19/21)	

注) ()内は、(返却あり判断/各群の自己主張方略選択人数)

Figure 2. Frequencies of self-assertive strategy in six categories that each group chose.

Note. A close analysis of self-assertive strategies is shown in Table 1.

た。

対人葛藤場面において自己主張解決方略がどのくらい選択されていたかを、自己主張解決方略が選択された率を逆正弦変換した値に対して2(親密性：高い、低い)×2(既知性：高い、低い)の分散分析を行った。その結果、親密性の主効果($\chi^2(1)=12.814, p<.01$)と、親密性×既知性の交互作用が有意であった($\chi^2(1)=4.672, p<.05$)。親密性の主効果について多重比較を行ったところ、低親密条件と比べて高親密条件が有意に自己主張する率が高かった。また、親密性×既知性の交互作用に対して下位検定を行ったところ、高既知条件における親密性の単純主効果が有意であった($\chi^2(1)=16.238, p<.01$)。また、低親密条件における既知性の単純主効果に傾向が見られた($\chi^2(1)=3.409, p<.10$)。つまり、高既知条件では、低親密条件と比べると高親密条件において有意に自己主張することが多かった。また、低親密条件では、高既知条件と比べると低既知条件において自己主張する傾向が見られた。

条件群ごとの各自己主張解決方略の選択

対人葛藤場面における条件群ごとの各自己主張解決方略の選択頻度を Figure 2 に、その解決方略に至った理由を Table 4 に、また返却の有効性を Table 5 に示した。

対数-線型モデルのあてはめによる、2(親密性)×2(既知性)×6(自己主張解決方略)の分析を行った。その結果、S4の主効果がプラスに有意であった($\hat{u} =$

.640, $SE=.189$, $p<.01$). また, S5の主効果にプラスの傾向が見られた ($\hat{u}=.367$, $SE=.211$, $p<.10$). つまり, 全体的にS4が多く使われていることが示された. また, 高親密条件のS1 ($\hat{u}=.614$, $SE=.293$, $p<.05$) と低親密条件のS5 ($\hat{u}=.434$, $SE=.211$, $p<.01$) の交互作用がマイナスに有意であり, 高親密条件のS5 ($\hat{u}=.434$, $SE=.211$, $p<.01$) と低親密条件のS1 ($\hat{u}=.614$, $SE=.293$, $p<.01$) の交互作用がプラスに有意であった. つまり, 低親密条件と比べると高親密条件で協調的な自己主張解決方略が多く用いられ, 逆に高親密条件と比べると低親密条件で身体的な攻撃による自己主張解決方略が多く用いられていた. 高親密条件で説得や説明の要求による自己主張解決方略が多く見られる傾向があった.

まず, 第1に, 各条件群の子どもの場面に対する感情認知の結果から考察を加える. 本研究においては, 対人葛藤を“個人の欲求, 目標, 期待が他者によって妨害されていると個人が知覚するときに生じる対人的過程であり, 感情, 認知, 行為を含むものである”(藤森, 1989)と定義したため, 提示した紙芝居の対人葛藤場面を子どもがどのように認知したかを査定する必要があった. 3条件(ニコニコ顔, シクシク顔, プンプン顔)間の χ^2 検定を行った結果, すべての群間でシクシク顔およびプンプン顔がニコニコ顔よりも有意に多く選択され, 幼児は, 4条件群ともに場面をネガティブな場面ととらえていることが示された.

次に, 対人葛藤場面における自己主張解決方略の選択についてであるが, 全体で自己主張解決方略がどのくらい選択されたかを自己主張する率を逆正弦変換した値に対して2(親密性: 高, 低)×2(既知性: 高, 低)の分散分析を行った結果, 親密性と親密性×既知性に差があった. すなわち, 低親密児と比べて高親密児に対して自己主張することが多く, 相手のことをよく知っている子(高既知児)に対しては, 仲良しではない子(LH)と比べて仲良しな子(HH)に対して自己主張が多く用いられていた. これは, 対人関係が親密であるほど, また当事者たちがその関係に関与しているほど対人葛藤の生じる頻度が逆に高まり, 親密な対人関係においても関心や意見の対立は避けられない(Coser, 1956)という結果と一致するものであった. また, 自己主張したら相手は玩具を返してくれるか, という自己主張行動予測の有効性を検討する質問に対して, 高親密条件の子は, ほとんどの子が“相手(仲良しの子)は玩具を返却してくれる”と予測していた. 更に, 自己主張するのはなぜかという質問に対しては, “相手は自分の言い分をわかってくれるから”, 次ので“言っても(自己主張しても)仲良くできるから”という仲間関係の維持や修復の容易さに言及した理由が多く, “いつも自分にも貸してくれるから”, “いつも一緒に遊んでくれるから”など, 過去の

経験に基づいた理由がその大半を占めていた. 以上, 自己主張行動予測の有効性と自己主張の理由の結果を併せて考えると, 仲良しな子(高親密児)との対人葛藤場面における幼児の自己主張には, それまでに形成されている友情あるいは仲間関係によって生じた信頼感が影響を及ぼしていることがうかがえる. Lewis (1973)は, 人が相互にペアとして認め合うようになるまでの相互作用の過程について研究し, 相手のことを悪い人間ではないと考えた場合コミュニケーションが円滑になり, そして相互交渉の反復を通して相互に相手への信頼感を高め, この信頼感の成立によって自分のことを相手に話す頻度が顕著に高まることを主張している. 本研究の結果からも, このことは既に幼児期から言えることが明らかとなった. つまり幼児は, 対人関係が安定していると自覚したときに, 自分の欲求や要求を明確に主張することができ, 自己主張によって問題解決を行うことができるものと考えられる. 幼児にとってその信頼関係や友好関係が一方的ではなく, 互恵的なものとして認知されていたならば, この傾向はますます強まるものと考えられる. 自分と仲良しな子は, 日常生活の中で特に接する機会が多いのでお互いの性格や行動を予測しやすく, 気心が知れているという知覚から, 自分の気持ちを素直に表現したり伝えやすかったのであろう. このように, 対人関係を認知する能力は既に5, 6歳児である程度獲得されており, この対人認知能力によって相手と自分の親密性が高いと判断された場合, 2者間で少々の葛藤が生じて, そのネガティブな状況を回避せずに自分の意見を主張して問題を解決できるようになることが示めされた.

また, 幼児は, 仲良しではない子(低親密児)に対しては, 高既知児(LH)と比べて低既知児(LL)に対して自己主張することが多かった. 相手のことをまだ十分に知らないが相手に対して嫌悪感を感じている子と比較して, 相手のことをよく知っていてかつ嫌悪感を抱いている子に対する自己主張が少ないという結果を導いた原因として次の2点が考えられる. 第1に, 自己主張行動予測の有効性についてであるが, 低親密児に対して自己主張すれば玩具を返却してもらえと思っている割合は, 高既知児(LH)では約62%, 低既知児(LL)では約91%であった. すなわち, 5, 6歳児は, 仲良しではない子(低親密児)においては, 低既知児(LL)と比べて高既知児(LH)に対しては自己主張しても玩具を返却してもらえないと思っており, 自己主張方略の有効性を認める率の低いことが明らかである. 第2に, 低親密・高既知児(LH)に対して自己主張しない理由として多かったのは, “相手が自分より強い子だから”, “(後から)報復されるのが怖いから”, “仲間関係の修復に時間がかかるから”などであり, これらの行動選択理由が低親

密・低既知児 (LL) と比べて圧倒的に多かった。この結果は、幼児が自分の身の安全や仲間関係の維持を優先して考える可能性が高いことを示している。従って、相手の特性をよく知っておりかつ嫌悪感さえ抱いている仲良しではない子 (LH) に対しては、それまでの日常生活の情報や過去の自己主張の失敗経験からその子の特性をネガティブにとらえていることが多く、それが不快な感情を導きやすくするため、自分の意志を伝達しようと試みる前に自己要求を諦めてしまったのではないかと考えられる。これらの結果からも明らかのように、仲間との親密性と既知性要因は密接にかかわっており、明確に区別すべき要因で、切り分けては考えられないことが示された。

最後に、対人葛藤場面における条件群ごとの各自己主張解決方略の選択頻度について考察する。各自己主張解決方略に影響する条件を検討するために、対数-線型モデルのあてはめによる2(親密性)×2(既知性)×6(自己主張解決方略)の分析を行ったところ、全体的に、説得や抗議によって玩具の返却を要求したり、自分の権利を主張するといった言語的拒絶による自己主張 (S4) が多かった。これは、対象が年中児・年長児であり、実験実施時期が仲間関係のしっかりと確立した2学期の終わりであったという時期的問題、あるいは自分の欲求を言語的に表現できるようになっていったという言語能力の十分な発達の問題が影響したと考えられる。また、高親密条件のS1と低親密条件のS5の交互作用がマイナスに有意であり、高親密条件のS5と低親密条件のS1の交互作用がプラスに有意であったという結果が得られた。Peevers & Secord (1973) は、人は友人よりも嫌いな人に対してより自己中心的な感情表出を多く行うことを見出している。上記の、仲良しな子 (高親密児) に対しては、一緒に遊ぶ・交互に使うといった協調的な自己主張 (S5) が多いのに対して、逆に仲良しではない子 (低親密児) に対しては、叩く・押すという身体的攻撃による自己主張 (S1) が多いという本研究の結果は、幼児においても Peevers & Secord (1973) の結果と一致することを支持している。また、子どもの遊び場面での相互作用は低親密児よりも高親密児に対して多く行われる (Doyle et al., 1980) こと、親しい友人同士の場合では葛藤が短いやり取りで終結したり妥協が生じる (Hartup et al., 1988) こととも同様な結果を示している。以上の点より、仮説は検証されたと言える。しかし、本研究は一場面での検討であることを考慮する必要があり、今後、今回示唆された結果の信頼性をより高めるために多くのさまざまな場面において検討を重ねる必要がある。

上述してきた問題は、社会的コンピテンス、すなわち社会的行動の有能さの問題と大きくかかわっているが、この社会的コンピテンスは自分と相手との力関係を

を認知し分ける能力 (対人認知能力) をもっている場合に、より有効に作用するため、仲間との親密性および既知性要因と問題解決方略が関係していたものと考えられる。また、従来の Asendorpf (1990) の研究では、子どもの自己抑制と相手との既知性との関連が明らかにされていたが、本研究においてもこの結果と対応するべく、問題場面における自己主張 (解決方略) に対して仲間との親密性および既知性が強く影響していることが認められた。つまり、自己主張的な面と自己抑制的な面とでは、自己の意志が働く方向は逆であるが、どちらの面に対しても対人関係 (親密性および既知性要因) は影響を及ぼしていると言える。このように子どもは、状況に応じた適切な対応 (自己主張方略および自己抑制方略) の仕方など、後々の社会生活の基盤となる対人関係の技術を、新しい環境や集団 (幼稚園や保育所など) の中で学ぶのである。以上のことは、自己調節能力の問題を検討する際に重要である。

従来の研究では、青年期 (14—16 歳) は友人関係に対する不安が最も強く、男子に比べて女子の方が相手からの拒絶や否定的評価を恐れる傾向が強い (Coleman, 1980) こと、自己調整能力には性差が見られる (山崎・白石, 1993) ことなどが指摘されている。本研究では、特に年中児と年長児を区別せず、年齢差および性差についての検討は行わなかったが、今後、より広い年齢において発達の変化を明らかにし、また性差についても要因に加え、詳細な検討を行っていくことが課題として残された。

引用文献

- Asendorpf, J. B. 1990 Development of inhibition during childhood: Evidence for situational specificity and a two-factor model. *Developmental Psychology*, 26, 721-730.
- 東 敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達研究: けんかおよび援助状況解決と社会的コンピテンス 教育心理学研究, 40, 64-72.
- Bakeman, R., & Brownlee, J. R. 1982 Social rules governing object conflicts in toddlers and preschoolers In K. H. Rubin & H. S. Ross (Eds.), *Peer relationship and social skills in childhood*. New York: Springer-Verlag. Pp. 99-111.
- Coleman, J. C. 1980 Friendship and the peer group in adolescence. In J. Anderson (Ed.), *Handbook of adolescent psychology*. John Wiley & Sons.
- Coser, L. A. 1956 *The functions of social conflict*. New York: The Free Press.
- Dodge, K. A., Murphy, P. B., & Buchsbaum, K. 1984 The assessment of intention-cue detection skills in children: Implication for developmental psychopath-

- ology. *Child Development*, **55**, 163-173.
- Doyle, A., Connolly, J., & Rivest, L. 1980 The effect of playmate familiarity on the social interactions of young children. *Child Development*, **51**, 217-223.
- 藤森立男 1989 日常生活におけるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, **4**, 108-116.
- 藤崎真知代 1992 人間関係の発達 藤永 保 (編) 現代の発達心理学 有斐閣 P. 213.
- Genishi, C., & Dipaolo, M. 1982 Learning thorough argument in a preschool. In L. C. Wilkinson (Ed.), *Communicating in the classroom*. New York: Academic Press. Pp. 49-68.
- Hartup, W. W., Laursen, B., Stewart, M. I., & Eastenson, A. 1988 Conflict and the friendship relations of young children. *Child Development*, **59**, 1590-1600.
- Hay, D. F., & Ross, H. S. 1982 The social nature of early conflict. *Child Development*, **53**, 105-113.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども間のトラブルに対する保育士の働きかけの効果——保育所における1~2歳児の物をめぐるトラブルについて—— 発達心理学研究, **1**, 107-115.
- Howes, C. 1987 Peer interaction of young children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **53**, 217.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 小林 真 1993 幼児の対人葛藤場面における社会的コンピテンスの研究——人形を用いた実演反応と言語反応による測定—— 教育心理学研究, **41**, 183-191.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ——いざこざで使用される方略と子ども同士の関係—— 発達心理学研究, **3**, 1-8.
- Lewis, R. A. 1973 A longitudinal test of a developmental framework for premarital dyadic formation. *Journal of Marriage and the Family*, **35**, 16-25.
- Mize, J., & Ladd, G. W. 1988 Predicting preschooler's peer behavior and status from their interpersonal strategies: A comparison of verbal and enactive responses to hypothetical social dilemmas. *Developmental Psychology*, **24**, 732-788.
- 無藤 隆 1992 子どもたちはいかに仲間か否かを区別するか 科学朝日, **617**, 18-23.
- Peevers, B. H., & Secord, P. F. 1973 Developmental changes in a attribution of descriptive concepts to persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, **27**, 120-128.
- Price, J. M., & Dodge, K. A. 1989 Reactive and proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Psychology*, **17**, 455-471.
- Shantz, C. U., & Hobart, C. J. 1988 Social conflict and development: Peers and siblings. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: A Wiley-Interscience Publication. Pp. 71-94.
- 内田伸子 1993 幼児心理学への招待——子どもの世界づくり—— サイエンス社
- 山崎 晃・白石敏行 1993 幼児の自己表現を自己主張と自己抑制からとらえる 保育学研究, **31**, 104-112.
- 山本登志哉 1991 幼児期における「先占の尊重」原則の形成とその機能——所有の個体発生をめぐって—— 教育心理学研究, **39**, 122-132.

——1994. 5. 2 受稿, 1995. 1. 21 受理——